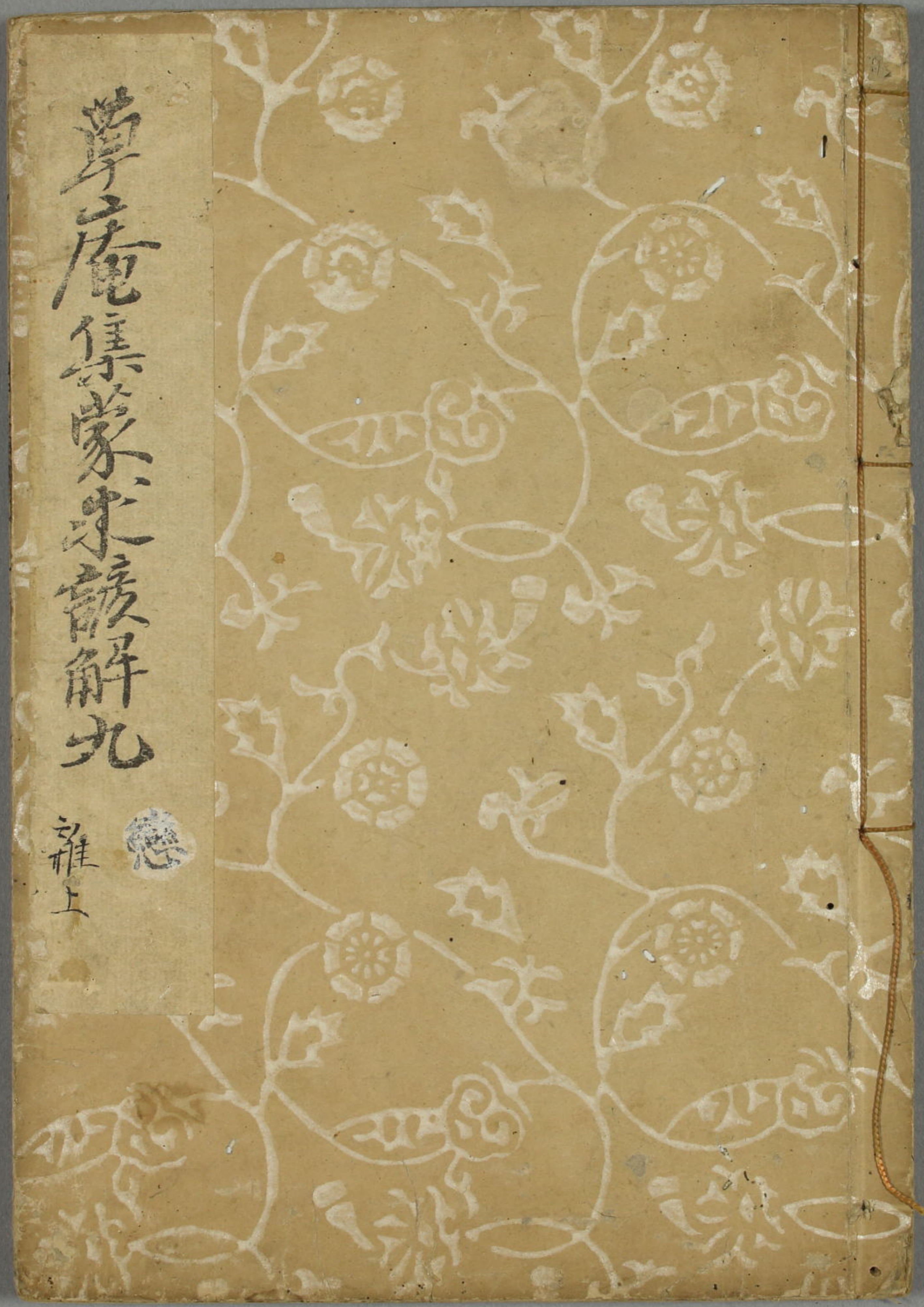


尊庵集蒙求齋解九

雜上



草庵和歌集蒙求諺解卷第十二

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

雜奇

氏部御家一日千首奇よ 天象

くふくわくと絶どど思と久々これるふ月日れりあうけく
とろくわくとんは言らんと明らと也。夜晝乃依也 けつとわくやち
がれぬおを極たいつれんまらうらわいぬん 衆人言 言れい月の思し。
明らと日乃照して天を初めらうらうて。同断なく世界を思と
思えをふらる。日月行道の来。書経堯典上帝曰咨汝羲
暨和。其月三百有六旬有六日云云此は言委略之

茅持院緒た大長家奇よ 曉

ゆあふ孫是ふをまきり里をふふるれらる孫はらうあふ孫と

武隈の松ハ二本を起人いふことりふまきこゝろん格律通な
後いりまいどと一本と悔いてよあり何を学び何を学び何を学び何を学び
いままとちかくう終ゆ人の教ふも非て齡五十に至りも也
まじらの長の也成長の後は奇りとるふけの也武隈の奥
別也教らるうでの甲下れるがう。学問を志すと云人の教
あしらぬ也

民部の家ハ一日百首小 名所小

かづらい心ばくしれうと世もたねつまらうていとねまらうがう
これをまぞとほくさに公とほくと此世一早くと死さに
まじ今つまちくいととめりまらう也生松魚笈茶一りて
笈茶もれば公ばくととてうり海うていわたならうと深
川の公ばくしれ減とととれ後人の公は急六
ゆまらう公ばくしれ中ぞうれと長秋詠
藤中

谷松年久といふ事を

うらうとぬあいいよとねまらうてねいくせれみらうらうらん
笈茶もれば春のよとちれば嘆てとらる物といはさ
冬よ春れよとさずてまのえれぬらゆらば年と縁の
からぬ也春奇にさらうてよあり

二品入道大納言家とて 定於一

うらぬ心竹よというけてよありまらう友たりハ常の友に也り
心しのいまさい貌將松共瘦心與竹俱空白氏十九
虚即我師一白二三竹の中乃空虚から成公乃そうも也
我がちらまらにいつらふよてけ奇にらんらうとく心の空一く
清淨を我ちら人いさけとい竹のまれをい叶入友とすらが
と同うまてまれの海と友とふと云かあり世ハ竹のちゆを

ついで縁乃詞也

侍從中細き。花のち後。和奇^{寄イ}亦人をりしめて。茶花^{サイハ}
園^ミ少く奇くまきしと云。 漣水

茶花園山城國葛野郡^{カトノ}有茶園^{サイ}乃^ニ亦^モ也^{ナリ}云。
茶花ハ觀魚量壽經^{クワンイリヤウジウキョウ}云。是人中^ニ分陀利花^{ブンダリカ}云云。
疏云^{シヨク}分陀利花^{ブンダリカ}名^ナ人中好華^{ニクニヨクニハナ}亦名^{モナ}希有花^{シユウカ}亦名^{モナ}
人中上華^{ニクニヨクニハナ}亦名^{モナ}人中妙好華^{ニクニヨクニハナ}此華相傳^{コノハナノトコトヲツト}名^ナ茶^チ
花^カ云云法聰記^{ホウソウキ}云^ク此云白蓮華^{コノトクニハクレンハナ}云云名義集^{ナギシツ}云^ク分
陀利^{ブンダリ}此云白蓮華^{コノトクニハクレンハナ}記云^キ論語^{ロンゴ}公治長^{コウヂチヤウ}篇^{ヘン}注云^ツ茶
函君^{ツツノミ}之守龜^{ノモリカメ}云^ク此文^{コノミヤコト}茶者^{チノモノ}靈龜^{レイカメ}之号也^{ノナリ}出^デ茶
地^チ史紀^{シキ}龜策傳^{カメサクヱン}云^ク龜千歲^{カメニチノサトシ}乃遊^{ノトビ}蓮華^{レンハナ}之上^{ノウヘ}云云
此文^{コノミヤコト}蓮華^{レンハナ}者^{モノ}茶所^{チノトコロ}遊^{トビ}之華^{ノハナ}千歲^{ニチノサトシ}龜^{カメ}即是^{ナリ}靈
龜^{レイカメ}故^{ナリ}也以^モ史紀^{シキ}文案^{ミヤコト}今^{イマ}釋意^{シヤクイ}言^フ茶園^{チノトコロ}君^{ミコト}之守龜^{ノモリカメ}

出茶地因以為名長尺有二寸云云

一とらふそんをまらね松風のいざを絶ぬ漣れまゝ系
一とらひいざもそれい漣乃まをさうてつり。一とらひ
漣乃音とづりりまらねハ。松のいざも絶どしてよく漣
の音と似れば也。一とらひ。絶ぬも。系乃縁也

態^{クマ}也^{ナリ}如^{ナリ}音^ノ漣^ノ少^ク

と少くもつり漣つをれわりのぬまをひく日^ヒもぬし
てよりあるは天より落ると云依して。また俾^シをさり^ル例^{レイ}
せもこれぬねは白きの上より落り布引の漣^ハ飛^{トビ}
滝直下三千尺疑^シ是銀河^ニ落^ル九天^ニ望^ミ廬山^ノ瀑布^ノ泉^ノ落^ル林^ノ
梢^ノ多^ク碎^ク滴^ク引^キ合^ス又^モ下^ルわたりぬると水^ノを^シり^テ
物を^ヲう^ケか^スま^ス也

後宇多院宰相典侍。及よ告くまけふとく。土師門。

禪尼乃結下婦 ときめらまきし名不奇し

塩竈浦

宰相典侍、志願すか土沙門、禪尼、ふきをわす。母、不分
明一本云。内道女。系圖云之。為道母。賀茂神主氏
之。女。作者部類云。為道おト。女。後千載。後拾遺新
千載作者

よがたれ海士のともをきてこれハ輝そとれあふり立いり
今ハ塩をとりやくす。あまの梅の輝のよきて。たぐはとさうあま
立れ也。例系乃たれたれ不いさうらさみの身まうりての秋。か
くあふりて有るる。志不がはと云不り。さほをほくれ
あふりてあふり。志不くて船路ふし志不がまのうらり
くもてくくわらふ。此奇の心をくくして志不厚く人いさく。
あまの朝夕れ輝のよきと。宰相典侍をきくふかたり。漢

漢烟光漁浦晚 歌津三 伴津

舞惠よりをけりし名所あり

明海深

あふりぬるたれあふりやうらみさ。塩のふらひさきあはせよ
志不いみらしの何をくく。さきあふりし。何をくく。あふりたる也。
倒語也。あまのあはれ也。塩いみらさうら。いさうらさうら。あはれ
あふりし也

ゆりし作のいしゆれねとく延まれうづささか
をて

かくてあふりしと海ふさむ。いしゆれねとく。あふりしとく。あふりしとく
此也。を苦海とさう。仁王經云。十善菩薩。發大心。長別
三界。苦輪海止觀。日。人命無常。一息不追。千載長逝
函塗綿邈。無有資糧。苦海悠深。船代安寄。往生
礼讚。日。壯々六道。無定趣。未得解脫。出苦海。孟蘭

絶ハ俗、ハ俗、ハ俗、ハ俗、ハ俗也。荀子曰。絶ハ龍ハ五ハ技。能ハ龍ハ不ハ能ハ上ハ屋ハ能ハ縁ハ不ハ能ハ窮ハ本。能ハ浮ハ不ハ能ハ渡ハ谷。能ハ穴ハ不ハ能ハ掩ハ身。能ハ走ハ不ハ能ハ先ハ人。ハ非ハ予ハをハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

定海僧初訪于後陸子。比良、湊りたる所。

と陸れむの湊、小舟とめて月、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

青。是、盡乃舟をえて、後乃舟とせしめて、系てゆんと志す心
かり。引合つる一

浦ねと

あがむるや、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

例、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

後拾雅上、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

ね、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

茅抄院賜た大臣家命、同心を

しく、ハのハまハにハてハあハくハまハばハ黒ハいハ筋ハをハひハきハむハのハ夢ハ。月ハのハまハにハてハ落ハちハてハるハたハ。春ハのハまハにハてハ精ハをハ。雙ハ方ハのハ龍ハ乃ハ為ハるハ也。さハびハとハもハ亦ハ也。さハらハぬハ春ハ日ハのハ南ハをハわハり

秋風よもよもよと来て麻の妻をまよふ夕言ふかく毎日ほろい
るゆへ也

長麻と

ほろいりんちりきて小倉ふらふらしてよまればわりの声
梓らむけハ本末我方にまよふことまよひの念ハ 春道別指 扱ハ
一ハ妻をらつゆハ麻の扱れまよふ也。小倉ふらふらと方によ
りてよまればわらふ。よまらふらふらゆへにまよふことまよひを
とてつら。夕言ふ妻

川の勢

ふらせればよけく秋風ふらふらしてどろろふらふらればわらひ
吹まよふ吹頻るも吹まよふとまよひの念。此方ハ吹まよふ也。念。上志
意の二首。目録は風煙吹くものまよひは念。奇の念ハ。妻を波
り吹くことまよひ也。葉舟のまよひはまよひしてまよひはまよひ。

面白き事也

侍子と入道大細言九月十三夜十三首

第一月思者

老くわらうげはうきれど月のそぞろきぬよれうきみきり侍子
大分は月をまよひてこれぞは扱れハ人ハ老くも也 侍子
わらうきもいれど。月づりなまよひれ若の形えられが。わらう
あて。形え意れど。月のそぞろ何をまよひて。月をまよひて
よ。じつと目ハ。まよひみらや。わらうきハ。わらうき。月のそぞろ
秋れららうらめて。仁和寺。唐室。みらうら

山里小月のけととみそめて居るてをハ。まよひわらうき
時こそわら。山里の月れ面白く。侍子。わらうき。まよひ
まよひ也。出家ハ。葉下。不三宿。まよひ。まよひ。まよひ。まよひ
戒心。わら。まよひ。まよひ。まよひ。まよひ。まよひ。まよひ。まよひ

色の子狩は色この後也 春の夜さの子狩はつるんきれ
引と入つたの程も 鳥見 春上 秋のあまきぐんをけつとふは
ゆきの千枝ちうち 法文不記 古秋下 ともね本のく城はさゆゆ風も色乃
子狩よ見ゆ也 ともね本のく城はさゆゆ風も色乃
同くれの冬にねせなれ本のをふりほもきん 格下 外もま
り可きその終まより西の方本のくねりぬ み家記

川氷と

そとじこらかどくちまはく小岩はまうにしよ川ねの
まのさじこに殊い川ゆ流す かた ともね本のく城はさゆゆ風も色乃
りうてまうちうちのさうなるねの外より えや 平くおる也
ハ流とあよりちや氷のゆ也

水鳥

池の氷は こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

氷つ池水 こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

十月は梅花れ こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

トヤ

林五月さのうけぬ小舟梅ハ こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

井中月末のく こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

くをねさ こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

つるやく こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

書 こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

ふ こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

君 こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

は こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

少 こま 小舟をぶらふさきをしに輝乃をさ々さ

ホッる

長河の返り也

うらまはせりおのふりあまのこも信ふしとれたつたづねん
中とぬれりも。空上人と本行く信まらぬしつねとていふ
あまのわりのまはあまのれり。あまのまもあまのいひま
あま。本可あま同し。いひまのまはあまのまはあまのま
夕暁 渡り
言ふといふ物うらまはせり。井つらうとてさくさくれそ
山寺れ入おの境ろあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
あまて。日れれれりもあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
してらるれりもあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
うらまはせり也。非もあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
こまらるれりもあまのまはあまのまはあまのまはあまのま

民部の家々首 浄侶夕帰

信ハ伴也。爾也。伴侶ハ僧也。觀空浄侶ハ懸月頌綱 依下
我信在亦わりの境ろあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
あまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
くう。浄侶のまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
世中まはあまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま

山里ハおのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
我ハおのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
よらう。山里ハおのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
まらるれりもあまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま
風乃まはあまのまはあまのまはあまのまはあまのまはあまのま

於らるゝのわくもいふもあつてとてさういふ人こそあれ
後よ、く入つたわくもいふまのあつたはびくのびつてくちの信く
も、公のゆゑあつたゆゑいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
おしよ也

仁和寺唐室あつてあつた

せれとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
はかまごの嵐のうきに仁和寺はまごの道とあつたゆゑ
間れまも折れ人れくれば、松風よとてまごのうた也

三寶院僧正坊あつて 山家月

あつたまごのいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
後者、物執着とゆきま也。月をいふもいふもいふもいふもいふも
うらと、これ執着のうらと成也。うらと、月が山中の清世たるも
すくく雪月花風をいふ也。公の雁い折れと悟の好ともいふ

の。又迷ひの好ともいふ。和寺とよみ。詩文をいふも同一

浄子た大納言家四妻百首

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
山中のいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
か。うらと、これ執着のうらと成也。うらと、月が山中の清世たるも
あつていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
さし、いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
まもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
は、いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
思ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

人く小白川なる所あつて十首新詩をいふもいふも
山家夕嵐

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

長くすみくして始まじ。春風身に入てさびくやゆめ

氏初々家十首よ ね風

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

し里の人のこりぬづらさびしと思ひます。人れこりぬのそ

非。春風と常はさびきねをさす也。これと返る也

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

友とこくねれ風とをさとさどハねんさやさしあはし

は言。新拾遺集。新中へ入。新のふはねんさやさしあはし

かなんげねをうらされば。今まで友とさすね風と入りあつ

ゆさささ。いふくし里やさびくうらさ也

新拾遺よ ね風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

新拾遺よ ね風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

は言。新拾遺集。新中へ入。新のふはねんさやさしあはし

春風の何れに友とまじね風を。は言の聞きてうの友がたぐ
いしわとれさし。は言。春中せらる也。これの何れにね風とま
らて。春方秋河のさし。うらさと事とさる也。金殿天樓
は言。春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

春風とたどさびさしと里をこりさぬのそと思ひくるか

伊子太史の家四季百首

小田田れむこのうきをいあかしてありよこの世よんらくんと
くさ田を字ふれ板に緒を付て引つと物也衣ぶに云
及はくす大極一田を引板にれとてすもいふ之終りいひさ
う以音れれり手習緒とつけあひつり例秋田りるひさねは
まは打ててすもす人をもてるは衣笠田余ま未 いていあふて引
物るれいぞれさせん何とて公の引くまをく引板にうて思入
んをよあり引板に心篇秋秋田家兼田家秋風よ

寄情述懐くそりやを

くひんれさしりをれぞ控やめうさこりあへてあふらんこりよ
あさこりもは掻籠あく詞よ云を此奇よは垣の内りくこのり
ままこりてさうの掻捨る掻捨するを同一まうてあふれ詞也
あさりの類也例いんせんちんが園生のわくれ作うここのりよ

世の中とり後成彩

あすれ道乃情をえ捨やんまよと也

等標沈悟た大良家五首よ述懐

あさりとさく人あはまうれうのさかれんぶよ孫をたふ人じ
五思ちる奇をもあさく人あはまうれうてさくのあさり
きとくちてぶさ也

ねあらんを

あうれ浦小考てかこくわねるうづものさか思よへうさこ
和秋浦の紀列の名前されどもその事によていつ事也
ねがねの老てかこけいもまごうのねあうれ五思も老事
てこのひあれぬるの煙もあやあこつうのれさ事也どつ
ゆれぬる 徳共よ昔の下にのけりて埋さぬをみるぞ
あさり今頼下遺文三十軸軸々金玉盤龍所原上土埋

骨不埋名白氏詞詠

文詞

新子裁集えしりしはしつら出づりしを。彈正まの

中後まとさうしんせまゆりやぶふのしを返

ふとさうまこれ玉のそであうけの若瓜のこりといふ

和奇まをちてみづさしむくあをばさり。金玉まの

類也ま撰集ま入ゆ人ま分まみづさてあしりあわらば。上代まり

の風ま依まをいけしきるこゆる也

けさ

老れはまかさねふしむねのむとくばいひもあたまに

一二の句ハ老のつらさる後也。老るはりうさる身まはかく

けりさくちる思ま依まと玉れまふまもりはしき

兼退まの也

白氏文集。余年七十一。不事於吟哦まとこれあふ

やいひて

今ハりんとしとせどあそらうまきふ後れわりのさ

白樂天ま乃詞のつくれ河師まも七十にわきんされい。和奇まは公

とよせ候ま。世乃まはし針まと成まとさう也ま。ゆる信ま乃

縁の詞也

序子また大細言家まゆく 寄身まは信

和うれ浦まやるぬくは世まあつとつとさむ老のまを

大方まは月まをさしとこれ此後まハ人の老まとさうとの時まある

たまの代まをさしてさく撰集まさう入まわれはうりさまなう

それとつれいさ内ま年月まをかさひて老るはと成まり也ま。お

の浦まとさゆ人ま老の候まと物まされさるむの縁也ま。和まはかく

依まつと也ま。何まはれとも身まれ老るる幸まはかく也ま

聖德太子御製 述懐

世をうとくつらうそねわたりぬ我身を人よつらうとつらう
教する身なれば何事ぞ人あつたわつたは世をじしとお
ひし事もし人あつたわつたは世をじしとお

三寶院傍正坊ありてありんを

偽りのあつたわつたは世をじしとお

中皇古 雑古 けせなまゝにうとくつらうとつらう

はずぬの偽りのあつたわつたは世をじしとお

外事麻衣草座亦容身相逢盡道休官去林下何

曾見一人三詩 公里に三詩 人れ言草は此住居三詩

形部少輔大江廣房部をばつらうとつらう

此身のいづれぞいづれぞいづれぞいづれぞ

かゝるもろくもろく也方の字はあつたわつたは世をじしとお

應長は法修一百首

應長の花園院年号也

世間のいづれぞいづれぞいづれぞいづれぞ

東の松をそとつらうとつらうとつらうとつらう

をばつらうとつらうとつらうとつらう

和音のあつたわつたは世をじしとお

迷情の奇ありあきとて俗し中

ちりばなれをわくふらうと家をわかれろろい得てくかか
強りれ齡のつなむもわらぬ身なれぬ也とも。身をさふぬ
きて心閑しそらぐとちよゆ老てつらくかたふ入ん事と志
ぐ也。身をを重し。奥ふよつひつひくも也

けき。新後拾遺離下入思しとこくけうと有。伴は終終
今一位より上りゆく思し。任し。をこきりて事と悔ふ也
このふそのなんとして。は衣も今一入多ほくすほら中と思
ひいりなく。かた内よくらうけり墨線乃神と年をこくも也
くいつるは名聞乃色衣。非。けがすもは衣の色も次分れ
ほくからゆへ。よまていつる也

中けうと張るいと思よ中くふ乃わくはたつ縁也

と申し世界れゆるれば世間のうきな。一相無して有るは
思ふにうして申にけしてふ乃わくをまきとひも。世間は長ら
わくの字短く長らふと申す也。と申しわてわわく。深く尋
る非。姑。知真隠者。不必在ふ林乃をこきりて。三男。一
心。ほくちよへ

人く影をさぐりて秋のみゆ

寄本迷情

おら風ふせきたよりをいりせん老来はくそわわつてぬ。子小
栢の母の事なれりとも母の老て栢くをぬぐりたよつりてふ紙。
おら風雨をふせぐけうといりせん。今少の事れよつひ
なれば夜合。位の事。幸な。不自由のるまやうに。孝とつじ
たれとの修也。わら風ふせきた。わげの栢より小萩ありと
思ひ。こそやれ。相妻。け詞をさわり。一後終所。俗。ゆり。四乃
奇。ゆり。せ。は。栢。く。く。も。吾。世。は。栢。く。く。故。老。る。母。の。抱。抱。と

勝如來のときよりみゆりよ 懐舊

愛しうとていつかきこし年月のいろせむれうとてあつと
 ち一方を思ふは。愛しうとてあつとあつとこころはたつたあつと
 けしうとていつかきこし年月のいろせむれうとてあつと。一切有為法如夢幻
 泡影如露亦如電。應作如是觀。金剛經の又とてあつと
 ねあつとを

可いづり神やいねまんごいでれあつとあつとあつとあつとあつと
 とまきし事よとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ちし思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 涙は神のかりきつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 まきしとて候也。思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ち子た入道大細云家十首よ。愛
 とつとてあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

ほねまきの河に。昔の又いふとあつとあつとあつとあつとあつと
 ちし思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ねあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

獨懷舊

けしうとていつかきこし年月のいろせむれうとてあつと
 我身のいろせむれうとてあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ちし思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ねあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 我友とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ちし思ひあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ねあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 引合へし老去親知少れ詩云とてあつと

金蓮寺寺合 懐旧

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

